光文社時代小説文庫

伊達政宗(一)

長編歴史小説 山岡荘八

光文社文庫

長編歴史小説
伊達政宗（一）
著者　山岡荘八

昭和61年1月20日　初版1刷発行

発行者　大坪昌夫
印刷　凸版印刷
製本　凸版印刷

発行所　株式会社　光文社
〒112 東京都文京区音羽2-12-13
電話　東京 03(942)2241(代表)
振替　東京 6-115347

© Sōhachi Yamaoka 1986
落丁本・乱丁本はお取替えいたします。
ISBN4-334-70289-9　Printed in Japan

光文社文庫

長編歴史小説

伊達政宗(一)

山岡荘八

光　文　社

伊達政宗 (一) 目次

出生 9
生きる価値 48
雪割草 87
風雲機熟 128
孤独な竜 169
人取り橋 208
さんさ時雨 250
臥竜血を吐く 290
日本人・山岡荘八 村上元三 331

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

伊達氏家系略図

- 稙宗
  - 晴宗
    - 親隆（岩城家を継ぐ）
    - 輝宗＝義姫（最上氏）
      - 政景（留守家を継ぐ）
      - 昭光（石川家を継ぐ）
      - 盛重（国分家を継ぐ）
      - 直宗
      - 政宗（梵天丸）＝愛姫（田村氏）
        - 正室系
          - 五郎八姫（家康六男松平忠輝室）
          - 忠宗
            - 綱宗
              - 綱村
                - 吉村
            - 宗良（田村家を興す）
          - 宗綱
          - 竹松丸
        - 側室系
          - 秀宗（母飯坂氏・宇和島藩祖）
            - 宗利
              - 宗贊（むねよし）
          - 宗清（母飯坂氏・飯坂家を継ぐ）
          - 宗信（母多田氏）
          - 宗泰（母塙団右衛門氏）
          - 宗高（母柴田氏）
          - 牟宇（むう）姫（母柴田氏）
          - 宗実（母芝田氏・伊達成実の跡を継ぐ）
          - 宗勝（母只野氏）
          - 姫（母只野氏・亘理宗実室）
          - 千菊姫（母村上氏）
      - 小次郎（竺丸）
  - 義宣（大崎家を継ぐ）
  - 実元
    - 成実（藤五郎）
  - 宗澄
  - 某（四郎・家臣の桑折家を継ぐ）
  - 晴胤（葛西家を継ぐ）
  - 宗清
  - 宗殖（家臣の村田家を継ぐ）
  - 綱宗（家臣の亘理家を継ぐ）
  - 元宗（綱宗死後跡を継ぐ）
  - 康甫（東昌寺住）

田村氏家系略図

盛顕―義顕―隆顕―清顕＝宗顕（清顕の弟）

女（愛姫・伊達政宗室）

最上氏家系略図

義淳―義定―義守―義光―義康

義光―家親―義俊

義光―義忠（山辺）

義守―義直（楯岡）

義守―女（義姫・伊達輝宗室・政宗母）

伊達政宗　卷一

出生

伊達政宗は、永禄十年（一五六七）八月三日、米沢城内において、城主伊達輝宗の第一子として生れた。この時父の輝宗は二十四歳。母は山形の城主最上義守の長女義姫で、二十歳の初産であった。

この永禄十年はどんな年であったろう？

日本の統一に最初の道をつけた織田信長はこの年すでに三十四歳で、当時の将軍足利義昭を擁して入京を遂げる直前に当り、二十六歳の徳川家康は、長子信康のために、信長の長女を娶ってやった年にあたる。後に政宗を苦しめた秀吉は三十二歳で、信長の部将として盛名を馳せだした頃だ。

後年伊達政宗が、自分をして、もう二十年早く、この世に生を享けさせていたら、決して彼等の下風には立つまいものをと慨嘆させたのは、この年齢差を指すものだ。乱世の英雄としては無理もない。

永禄十年にはもはや信長、秀吉、家康の三人の手で、功業先取の軌道は日本に敷かれだしていたからだ。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

父の輝宗にしても、この三人よりは年が若い。したがって、輝宗の器量が政宗に劣らぬ抜群のものであったら、或いは奥羽の歴史も大きく変っていたかも知れない。しかし父の輝宗は思慮はあったが、政宗ほどの胆略は無かった。それに、当時はまだ父の晴宗、祖父の稙宗が二人とも生きていて、祖父の稙宗は丸森城（伊具郡）に、父の晴宗は杉ノ目城（福島市）にあって、頑固に相争っていたのだから、孫の輝宗は、家督は継がされていても実力の揮いようがなかったのだ。

支障はむろんそれだけではない。北には羽州の探題としての最上氏があり、南には相馬、上杉などの強豪が控えている。会津には芦名氏があり、更に、大内、田村、石川の諸豪も、顔いろ次第で敵にもなれば味方にもなろうという。この奥羽の天地は、中央よりも一歩も二歩もおくれて、まだ戦国のまっただ中にあったと言ってよく、伊達輝宗が、山形城の最上義守の姫を迎えて妻としているのも、言うまでもなく、北からの脅威を減少させようという、生き残らんがための遠慮につながる政略結婚にほかならない。

さて、こうして永禄十年という、政宗誕生の年を一瞥しておいて物語の中に入ろう。

1

政宗……というよりも、伊達家に嫁がせた最上義守の秘蔵の姫、義姫が初産に男の子を挙げたという知らせが、最上氏の探題館と呼ばれている山形城にとどいたのは八月三日の宵であった。

当時の山形城は、いまの山形市の西部の平夷（平坦な地）にあった。標高約百五十メートル。酢川と馬見崎川の間だが、水の迫る場所ではない。堅壕は重畳と構えてあっても、その外観は駅舎に似ていた。

その城内の一室で、当主の最上義守は、その日も熱心にわが子義光のために、六韜三略を講じているところであった。

もともと義守は、わが子義光にあきたらなかった。嫡子の義光よりも、その妹の義姫の方が遥かにこの戦国を逞しく生きてゆける気丈者に思えて、

「――そなたは気性で妹に劣るぞ」

そう言うのが口癖になっていた。これは、あながち義守だけではない。当時の父親に共通した切ないあせりの表白だ。つねに薄氷の上を歩くに似た戦国の明け暮れは、いわば見えないものに怯えて生きる恐怖の生涯と言ってよい。

いや、その恐怖感だけであったら、それから遁れる術はなくはなかった。出家すればとにかく生命に危害を加えられる怖れは半減しよう。

ところが人間は、そう簡単に解脱出来る動物ではなかった。煩悩という名の無限の欲望を背負わされて、どんな危険の中もさまよい歩かねばならない宿命をもって生れている。

義守が、暇さえあれば伜の義光に六韜三略を講じてゆくのも、実はその「恐怖の中の欲望」をどうして摑み取ろうかということに他ならない。

そう言えば、当時の武将で、六韜三略という書物の厄介にならなかった者は殆どあるまい。

源義経が鞍馬で修業中、鬼一法眼からこれを授けられたと伝えられて以来、これは戦う者の一度は足を踏み入れなければならない必勝法の秘伝とし、兵法の聖書とされている。

今日の左翼主義者が、わかってもわからなくても一応マルクスを通らなければならないとしているのとよく似ている。信玄もこれを学び、謙信もこれを読んだ。元就も学び、家康も調べ、秀吉も竹中半兵衛の講義を聞いている。

奥羽の地でも、伊達も最上も大崎も相馬も、みなこの秘伝の中から戦勝を掴みとろうとして、そして、勝ちもし負けもするのだからおもしろい。

「――よいか。今日は将威の巻を読み聞かす。これがこなたの骨肉となっておらねば、必ずこなたは妹の婿にしてやられるぞ」

義守は、燭台の灯りを近づけ、わが子を睨むように見据えて物騒なことを言った。

この六韜は、例のまっすぐの針で悠々と魚を釣っていたという太公望が、武王の質問に答えて兵法の奥義を語ってゆくように書かれている。

六韜とは文韜、武韜、竜韜、虎韜、豹韜、犬韜の六つにわかれて編述されているからで、世に言う「虎の巻」というのは虎韜篇のこと。三略は上略、中略、下略と計略を三つにわけて張良が兵法を語ってゆく。

「よいか、将には威がなければならぬ。将軍たる者はどうして武威を立て、どうして軍令を徹底せしめたらよいかと、武王が太公望に訊かれた。すると太公望は、こう答えた。よいか、将は、大を誅するをもって威となし、小を賞するをもって明をなす」

義光はこの父を少しくどすぎると思っている。もうその位のことは二十二歳の義光にはわかっていた。

「大を誅するをもって」は、幹部の悪を許すなということだ。上に立つ者が模範を示さなければ士気は地におちる。それゆえ士気が揮わない時には幹部の中の悪い奴を叩っ斬れ。さすれば粛然として士気はあがるぞと訓えている。

「小を賞するをもって明をなす」は、その反対に、下々の小さい善行も見落すことなくとりあげて褒めてやれ、さすれば名将であるとして、上下共に服してくる。

（その位のことがわからぬと思うているのだろうか？）

「わかったの。大を誅するをもって……」

「お父上！　早馬が着いたようです」

「なに、そなたはわしの言葉に耳を傾けているのではなかったのか」

「智者は、八方に心を配っております。はて、何処かで乱が起ったのでは？」

片膝立て、太刀を引寄せた時に、

「申上げます。米沢より中野宗時さま、早馬にてお越しなされました」

「なに、婿どのの家老が来られたと。よし、通さっしゃい」

あわてて書見台を片付けたところへやって来たのが、義守にとっては最初の孫、後の伊達政宗の誕生を知らせて来た米沢からの使者であった。

伊達家の老臣中野宗時は汗を拭きながら入って来ると、

「男子出生、母子ともに無事――」
と早口に言った。
これを聞いていちばん無邪気に喜んだのは義光だ。
「そうか。わしにも甥が出来たのか」
しかし、おどりあがって喜ぶと思っていた父の義守は、
「それは重畳」
きびしい表情で頷くと、
「義光、お許は座をはずせ」
冷たい声で言い放って、ジーッと宙を見詰めてゆく。
「それがしが、同席してはわるいのですか」
「わるい！　密談があるのだ」
「この、芽出度い知らせに……」
「座をはずせと申すのだッ」
義光は首を傾げて出ていった。

2

義光が出ていっても義守は暫く宙を見つめたままであった。喜びを押えているのか、それとも、ここでも「将威――」を見せようとしているのか。

米沢の使者が笑い出した。

「お館は、笑うとご損をなさるようなお顔つきで。あまりにおあつらえ向きのご誕生なので、実はそれがしも空怖ろしくなりましたが」

「フーム」

「これで、伊達家はそっくりお館の掌中のものになった。ここでは素直にお祝いの盃をひとつ」

「待て。待たっしゃい。それよりも、輝宗どのは……婿どのは、心から喜んでか？」

「喜ばいで何としましょう。そもそもわが殿は信心深いお生れつき。それゆえ、始めから今度の和子は大日如来の申し子と信じきっておわします。おそらくご幼名は梵天丸……となりましょう」

「確とそうか。裏はないか？」

米沢の使者中野宗時はまた笑った。実は、輝宗の妻に義姫を乞いに来たのもこの中野宗時だった。

宗時は義守よりもぐんと肥えている。足利氏の同族で、斯波氏から姓を最上に変えている義守は、一見公卿を想わす風姿であったが、宗時は土臭い羆の感じだ。盛上った肩に太い猪首、眉毛も太く鼻も大きい。それでいて頭の回転は素晴らしく早いのだ。

「笑うてくれるな。実はの、わしは、おぬしに欺されたような気がしているのだ」

宗時は全身を揺って笑った。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com